

松 山 大 学 論 集
第 32 卷 第 6 号 抜 刷
2 0 2 1 年 2 月 発 行

総合的な学習の時間の指導に関する一考察

—— 小中高の連携を見据えて ——

作 田 良 三
井 上 浩 二

総合的な学習の時間の指導に関する一考察

—— 小中高の連携を見据えて ——

作 田 良 三
井 上 浩 二

I 問題の所在

1998年改訂の小学校学習指導要領・中学校学習指導要領、および1999年改訂の高等学校学習指導要領において「総合的な学習の時間」が創設されて以降、2003年一部改正、2008・09年改訂を経て、2017・18年の改訂に至っている。

中学校を例に挙げると、創設時は総合的な学習の時間が「各学校は、地域や学校、生徒の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うもの」と位置づけられ、「(1)自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。(2)学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。」というねらいをもって指導するものとされていた。

今次学習指導要領においては、その目標が「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力」の育成を目指すものとされている。つまり、総合的な学習の時間は、創設以降「横断的・総合的な学習」であり、「よりよく課題を解決し自己の生き方を考える」ことを目指すものであり続けている。

他方、今次学習指導要領では「カリキュラム・マネジメントの充実」が強調されている。中学校学習指導要領には「各学校においては、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。」と示されている。言い換えると、「学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくこと」である（中学校学習指導要領解説（総則編）2017 40頁）。

総合的な学習の時間は、各学校においてその目標を定めなければならないが、「各学校において目標を定めることを求めているのは、①各学校が創意工夫を生かした探究的な学習や横断的・総合的な学習を実施することが期待されているからである。それには、地域や学校、生徒の実態や特性を考慮した目標を、各学校が主体的に判断して定めることが不可欠である。また、②各学校における教育目標を踏まえ、育成を目指す資質・能力を明確に示すことが望まれているからである。これにより、総合的な学習の時間が各学校のカリキュラム・マネジメントの中核になることが今まで以上に明らかとなった」のである（中学校学習指導要領解説（総合的な学習の時間編）2017 19-20頁）。まさに「教科等横断的なカリキュラム・マネジメントの軸となる」ことを求められているのである（同解説 6頁）。

それにくわえ、大学テキスト開発プロジェクト編著（2018）では、学校段階間の「円滑な接続が図られるように教育内容や教育方法の計画・実施、評価・改善を進めていくことが重要である。その際、総合的な学習の時間が要となる」と指摘している。

総合的な学習の時間に期待されるこうした役割をふまえ、本稿では、総合的

な学習の時間が教科横断的なカリキュラムの要として機能してきたのか、また学校段階間の接続に寄与してきたのかにアプローチする手がかりとして、大学生対象の回顧調査を用いる。はたして学生は、どのような活動として受け止めているのだろうか。

Ⅱ 調査の概要

(1) 調査対象者

2019年度、文系大学において「教育課程論」を受講した学生を対象に実施し、71名から回答を得た(表1)¹⁾

表1 調査対象者の性別・学年

	2年	3年	4年
男性	42.9%	28.6%	28.6%
女性	34.3%	40.0%	25.7%
合計	38.6%	34.3%	27.1%

(2) 調査の設計

調査項目としては大きく3つに分けられる。

まず一つは、学習活動の内容に関してである。1998・99年改訂版には、学習活動の実施に際して配慮すべき事項として「自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること」(小学校・中学校)、「自然体験やボランティア活動、就業体験などの社会体験、観察・実験・実習、調査・研究、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること」(高等学校)とある。これらの直接的な体験が、どれほどインパクトを持って受け止められているのかをまず明らかにする²⁾

つぎに、学習活動をうながすための方法(資料・情報)についてである。学習指導要領には「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと」とある。他の学校や地域との連携は、カリキュラム・マネジメントにおいて重要な視点である。

三つ目は、他の教育活動との関連についてである。学習指導要領には「各学校において定める目標及び内容については、他教科等の目標及び内容との違いに留意しつつ、他教科等で育成を目指す資質・能力との関連を重視すること」、「知識及び技能については、他教科等及び総合的な学習の時間で習得する知識及び技能が相互に関連付けられ、社会の中で生きて働くものとして形成されるようにすること」など、「他教科等との関連」が強調されている。そこで、「教科」のほか「道徳」や「特別活動」と関連づけて学習できたかどうか、その実感について尋ねている。あわせて「自己の生き方を考える」ことに寄与したかを測る項目として、いささか狭義的ではあるが「職業や将来の進路」について学習できたかどうかも尋ねている。

このほか、最も印象に残っている「総合的な学習の時間」の活動についても記載を求めており、①活動の内容と②その理由を問うている。こうした具体的な活動内容を手がかりに、生徒視点から見た「総合的な学習の時間」について学校段階別に特徴を洗い出し、接続のあり方について考察を試みる。

Ⅲ 学生の意識

(1) 学習活動の内容について

調査票では、小学校・中学校については4項目、高等学校については5項目を挙げ、各学校段階別に「自分が行った活動について、実感として当てはまる順に」順位付けをしてもらっている(表2～4)。

この表から分かるように、どの学校段階においても「ものづくりや生産活動」が比較的少ない傾向に、「観察や見学、発表・討論の学習活動」および「問題解決的な学習」が多い傾向にある。学校段階別の特徴でいえば、小学校段階で「自然体験やボランティア活動」を「第1位」「第2位」に挙げる者の割合がやや高くなっている。

ただし、これらのカテゴリーの表現が抽象的なものであることは否めない。また、複数のカテゴリーに関連する活動も考えられる。そこで、学生にとって

表2 資料・情報の活用（小学校）

	第1位	第2位	第3位	第4位
自然体験やボランティア活動	32.4%	29.6%	23.9%	14.1%
ものづくりや生産活動	8.5%	21.1%	39.4%	31.0%
観察や見学，発表や討論の学習活動	47.9%	25.4%	21.1%	5.6%
問題解決的な学習	11.3%	23.9%	15.5%	49.3%

表3 資料・情報の活用（中学校）

	第1位	第2位	第3位	第4位
自然体験やボランティア活動	27.3%	19.4%	30.3%	23.4%
ものづくりや生産活動	7.6%	22.4%	33.3%	34.4%
観察や見学，発表や討論の学習活動	30.3%	32.8%	21.2%	14.1%
問題解決的な学習	34.8%	25.4%	15.2%	28.1%

表4 資料・情報の活用（高等学校）

	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
自然体験やボランティア活動	18.8%	15.9%	23.8%	17.5%	25.4%
就業体験活動などの社会体験	12.5%	19.0%	25.4%	34.9%	7.9%
ものづくりや生産活動	6.3%	11.1%	27.0%	15.9%	39.7%
観察や見学，発表や討論の学習活動	28.1%	34.9%	9.5%	23.8%	4.8%
問題解決的な学習	34.4%	19.0%	14.3%	7.9%	22.2%

印象に残っている当時の活動についていくつか取り上げておく。

まず小学校では，次のような活動が挙げられる（①活動内容と②印象深い理由）。

1. 自然体験やものづくりなどの体験的活動をつうじた，地域の自然や伝統文化の理解

- ①野菜を育てた→実食。②協力して何かを取り組む楽しさに気づいたから。自分の手で初めて野菜を育てる良い経験になったから（4年女子）。

- ①学外の河川敷での植林活動や飯ごうすいさん。②植林では、実際に自然に触れることにより、自然の良さや大切さを知れたため。飯ごうすいさんでは、友達と共に協力してご飯をつくることで、達成感を感じることや、友情が深まったため（4年男子）。
- ①川遊び。②楽しかったから（2年男子）。
- ①田植え→稲刈り→収穫祭（もち作り）。②食べ物の最初の段階から体験していることによって苦勞を知ることができる（3年男子）。
- ①田植え、スズムシの飼育、焼き芋。②なかなか経験できないことだから。育てる過程を覚えている。（3年女子）。
- ①地域の人と田植え、収穫してもちつきをする。②楽しかったから印象に残っている（3年男子）。
- ①うどん作りをしたこと。②すごく楽しかったから（3年男子）。
- ①昔の道具を使い、お昼ご飯を作ったこと。②普段使わない道具を使い、昔の人の苦勞、現代が以前と比べて発展していることに気づけた（4年男子）。
- ①モノづくり体験で進水式に行った。②目の前で大きな船を見ることができたから（3年女子）。
- ①工作の授業で、木でポストをつくったこと。②学校から離れ、業者の所で作ったから（4年男子）。
- ①たこあげ。②いっばいひもだしたら校舎より高く飛んだから（2年女子）。
- ①地域の人に昔の遊びを教わって交流する。②楽しみながら自分の地域のことや伝統を学べたから（2年女子）。

このように、地域と連携して校外で活動することで、学校内では普段できない体験ができる感動、作り上げる楽しさ、友だちと協力して成し遂げる達成感などが、印象に残っているようである。

2. 観察・実験, 見学や調査, 発表や討論

- ①学校の中や自分たちの身の回りのことで環境について1つ調べる活動。
②「〇〇レンジャー」というように名前を決め, グループ単位で調査, 報告をしたから(4年女子)。
- ①環境問題について。②図書館でグループになり, 多くの時間をかけて調べたため(2年男子)。
- ①職場見学をしました。私は洋食屋に行きました。②それまでしたことがなかったから(4年女子)。
- ①自分たちの地区(校区)を探検して, 色々なものを見つけるという授業。
②班の子と協力しながら自分たちの足で探し, 実際に実物を見て触れてという体験ができ, 疲れたけど楽しかったから。(2年男子)。
- ①ふるさと探検をした→高学年の生徒と地域を探検。(2年女子)。
- ①町内探索。②友達と仲良く楽しめたから(3年男子)。
- ①ハザードマップを作った。②みんなで校外なども歩いて探検気分になれたから(2年女子)。

これらは, 「グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態」を用いて, 校内外でしらべ学習や見学を中心に行った活動群である。特に以下のように, 地域の人々と交流しながら地域学習をすすめたことは印象深いようである。

2-2. 地域学習

- ①郷土のものを調べたりする学習がメインでした。②調べ学習がそこで楽しくなり, 色々な事を調べるようになったからです。自分の住んでいる市のことをより深く理解することが出来ました。また, まとめ作業も楽しく模造紙に絵や字を書いたりすることがとても楽しかったです(4年女子)。
- ①高齢者との交流(公民館で)。②地域の高齢者と関わって作品を作った

のが新鮮だったから（4年女子）。

- ①社会福祉施設（老人ホーム）に入居されている高齢者との交流。②訪問時に何をするかみんなで話し合ったり練習したりしたから（3年女子）。
- ①障害者理解のために調べ学習を他のクラスの生徒と協力してやったことは覚えている。②（小学生で）大変だと思ったから（4年女子）。
- ①地域の方々と川のゴミ拾い。②自分が遊んでいる場所がキレイになったから（2年男子）。

3. 自己の生き方について

- ①自分の12年間をまとめる。②自分の生きていることの尊さに気づいた（2年女子）。
- ①自分のなりたい夢をインターネットや本で調べ、全員に発表した。②他の生徒の発表をきいて他の仕事への関心が湧いた（4年男子）。
- ①中学校で学習することに関する調べ学習。②中学校では、どのようなことを学ぶのかに関して、詳しく知ることが出来たから（4年男子）。

自分史をまとめたり、将来の仕事や中学校について調べることで、そこでの自分の生き方を考察したりすることにより、自分と向き合う時間にもなっている。

中学校については、次のような「自然体験やボランティア活動などの体験的活動」がいくつか挙げられた。内容はさまざまであるが、後述する「職場体験」も含め、全体的に「体験」が重きを置いている。

- ①近くの植物園に初めて行った。②人生初の植物園でたくさんの植物と出会えたから。自然の大切さを知れたから（4年女子）。
- ①BBQ。②班で協力して分担して楽しめた（2年男子）。
- ①ボランティア活動（地域の清掃）。②自分たちが通っている道や、公園

を掃除し、トンネルがとてもきれいにすることができたので印象に残っている（4年男子）。

- ①福祉体験をした。②視覚障害の方の体験をし、福祉についていろいろ考えさせられたから（2年女子）。

高等学校については、ボランティア活動を挙げる学生もいたが、より広範な地域にかかわる（世界規模・全国規模の）今日的な社会問題について体験や調査を行っており、まちづくりにつながる実践方法の考察なども行っている。

1. ボランティア活動やものづくり

- ①地域の清掃。②学校から出られて嬉しかったから（4年女子）。
- ①ボランティア活動。（2年女子）。

2. 環境, 福祉・健康, 防災に関する体験, 調査・発表

- ①森林伐採（4年男子）。
- ①社会福祉施設での高齢者とのふれあいや日常体験（白内障や車いすの体験）。（4年女子）。
- ①老人ホームに行き、入居者と一緒にもものづくりをしたこと。②ものづくりをし、喜んでもらえたから（4年女子）。
- ①日本の問題になった病気などについて（2年男子）。
- ①高校で印象に残っているのは班活動で、南海トラフについて調べて、発表した。②今後到来する南海トラフについての知識（防災面での）や危機感を高める上で、非常に充実した活動ができたから（4年男子）。

3. まちづくり, 地域理解

- ①地域の特産物などを活かしてPRする方法を考える。②地域に対する理解度が深まったから（2年女子）。

福島（2018）においても同様な質問項目を設定し、中学校と高等学校の活動内容の比較を行っているのだが、それによると、中学校では「地域学習」「国際理解教育・環境問題・福祉や健康」「職業体験・自分史や家族史」および「その他」に分類されるのに対し、高等学校では「国際理解教育・環境問題・福祉や健康」と「その他」に集約されたという。

本稿では小学校時の活動についても尋ねているが、小学校の活動に多様性が認められるのに対して、中学校・高等学校へと学校段階が上がるにつれて徐々に活動内容が収斂されていくようすが見て取れる。地域の特色に応じた課題を取り上げ体験的活動に重きが置かれている点はすべての学校段階にみられるが、高等学校では「横断的・総合的な課題」をより広い視野から考察する機会となっている。

(2) 学習活動の方法（資料・情報の活用）について

調査票においては、「①学校図書館の活用、②他の学校との連携、③公民館や博物館等の社会教育施設との連携、④地域の教材や学習環境の活用」という4項目を挙げ、各学校段階別に「自分が行った活動について、実感として当てはまる順に」順位付けをしてもらっている。

まず小学校（表5）では、「地域の教材や学習環境の活用」が最も多く、「第1位」に挙げる者だけで過半数を占めており、地域住民との交流や「ふるさと探検」などの学習が行われていると推察される。なお、「第1位」に挙げる者の割合は学校段階が上がるにつれて減少するが、「第1位」「第2位」を合算すると、いずれの学校段階でも7割以上を占めている。

対照的に、「学校図書館の活用」はどの学校段階でも「第1位」は3割以上であるものの、学校段階が上がるにつれて増加し、高等学校においては最も数値の高い項目となっている。生徒の関心や知識あるいは調査対象等が、居住地域内からより広いエリアへと移行することにより、それに合わせた資料・情報の収集方法が採用されていると考えられる。ただしこの項目も、「第1位」と

表5 資料・情報の活用（小学校）

	第1位	第2位	第3位	第4位
学校図書館の活用	32.9%	31.0%	23.9%	12.9%
他の学校との連携	2.9%	8.5%	23.9%	64.3%
社会教育施設との連携	12.9%	35.2%	39.4%	12.9%
地域の教材や学習環境の活用	51.4%	25.4%	12.7%	10.0%

表6 資料・情報の活用（中学校）

	第1位	第2位	第3位	第4位
学校図書館の活用	36.8%	16.4%	26.9%	20.9%
他の学校との連携	10.3%	9.0%	23.9%	55.2%
社会教育施設との連携	14.7%	41.8%	34.3%	9.0%
地域の教材や学習環境の活用	38.2%	32.8%	14.9%	14.9%

表7 資料・情報の活用（高等学校）

	第1位	第2位	第3位	第4位
学校図書館の活用	40.6%	20.3%	15.6%	21.9%
他の学校との連携	12.5%	14.1%	23.4%	50.0%
社会教育施設との連携	18.8%	21.9%	45.3%	15.6%
地域の教材や学習環境の活用	28.1%	43.8%	15.6%	12.5%

「第2位」を合算すると、いずれの学校段階でも6割以上を占めており、利用頻度の高い方法といえよう。

なお、「社会教育施設との連携」は、「第1位」にはなかなか挙がってこないが、中学校において「第2位」で4割を超え、比較的多い部類に位置づくのに対し、「他の学校との連携」は、どの学校段階においても「第4位」、すなわち実感として一番少なかったと答える学生が最も多かった（小：64.3%，中：55.2%，高：50.0%）。

(3) 他の教育活動との関連について

「とても当てはまる」「やや当てはまる」を合わせると、義務教育段階では、「各教科」・「道徳」・「特別活動」と関連づけて学習することができた者の割合が半数を上回っている（表8～10）。なお、小学校の「外国語活動」については、2008年改訂版（2011年度全面実施）より導入されたものであるため、本調査の回答者においては、移行措置期間がわずかに重なる程度であるため、とくに低い数値になっていると類推される。

また、高等学校では、小中学校と同様「特別活動」との関連づけは実感できているものの、「教科」との関連づけについては、「とても当てはまる」「やや当てはまる」の合計が半数を下回っている。

一ノ瀬（2019）は、総合的な学習の時間が「教科等を超えた全ての学習の基礎となる資質・能力を育成する」役目と、探究的な課題解決において「各教科等で身につけた資質・能力を活用する」という役目の2つがあることを指摘したうえで、中学校・高等学校では週に各学年1～2時間程度しか時間が取れないために、とりわけ前者の土台となる学習経験を各教科で積み重ねることの重要性を説いている。

どのように関連づけたのかは質問紙上明らかでないが、小学校時の印象深い授業内容として「修学旅行や運動会などの特別活動について取り決め」（4年男子）や「運動会のふりかえり」（4年男子）、中学校でも「修学旅行の事前学習」（2年女子）という記述がみられた。

まず小学校では、次のような活動が挙げられる（①活動内容と②印象深い理由）。

1. 国際理解・国際交流

- ①色々な国の人と交流。②たくさん知れたから（2年女子）。
- ①モザンビークの国の現状を調べたり、知ったりして実際に現地の人と交流をしたりした。また、松山市内に放置されている自転車を譲り受け、そ

表 8 他の教育活動との関連（小学校）

	とても 当てはまる	やや 当てはまる	あまり当て はまらない	全く当て はまらない
他の「教科」と関連づけて学習できた	10.0%	42.9%	40.0%	7.1%
「道徳」と関連づけて学習できた	20.0%	42.9%	30.0%	7.1%
「特別活動」と関連づけて学習できた	25.7%	48.6%	22.9%	2.9%
「外国語活動」と関連づけて学習できた	10.0%	22.9%	47.1%	7.1%
「職業や将来の進路」について学習できた	21.4%	45.7%	25.7%	7.1%

表 9 他の教育活動との関連（中学校）

	とても 当てはまる	やや 当てはまる	あまり当て はまらない	全く当て はまらない
他の「教科」と関連づけて学習できた	14.7%	41.2%	42.6%	1.5%
「道徳」と関連づけて学習できた	11.8%	54.4%	29.4%	4.4%
「特別活動」と関連づけて学習できた	13.2%	50.0%	32.4%	4.4%
「職業や将来の進路」について学習できた	27.9%	51.5%	17.6%	2.9%

表 10 他の教育活動との関連（高等学校）

	とても 当てはまる	やや 当てはまる	あまり当て はまらない	全く当て はまらない
他の「教科」と関連づけて学習できた	15.2%	33.3%	45.5%	6.1%
「特別活動」と関連づけて学習できた	19.7%	47.0%	28.8%	4.5%
「職業や将来の進路」について学習できた	42.4%	36.4%	15.2%	6.1%

れにデザインなどを施し、モザンビークの人たちに渡したりした。②国際交流を実際初めて行い、世界の現状を知れたので、印象に残っている（4年男子）。

「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときは、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにするこ

と」(『小学校学習指導要領』1998)とあるように、各学校でそうした体験的な学習が展開している様子が見て取れる。

2. 人権教育・他者理解

- ①物語でこの人はどういう気持ちになるかみんなで考える時間。②この人はこういう気持ちになると考えることができた。
- ①いじめについて。②ニュースなどで問題になってなくすべきだと思ったから(2年男子)。

こうした道徳的価値にかかわる活動は、解説(特別の教科 道徳編)には「道徳科においては、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、年間指導計画に基づき、児童や学級の実態に即して適切な指導を展開しなければならない」とされており、他方、「総合的な学習の時間の目標を実現するためには、各教科、道徳科、外国語活動及び特別活動を含めた全教育活動における総合的な学習の時間の位置付けを明確にすることが重要」とされている(解説(総合的な学習の時間編)2017)。

カリキュラム・マネジメントの観点からみて、全体計画・年間指導計画の作成にあたり、こうした道徳的価値の取扱を適切に配置し指導することが重要であろう。

つづいて中学校に関する回答をみると、次のような活動が挙げられる。まず最も多かったのは「職場体験」についてである。その先駆的な事例として、諸富(2007)は兵庫県と富山県を挙げている。兵庫県では平成10年から「トライやる・ウィーク」として中学2年生が1週間、職場体験を実施している。また富山県では平成13年から5日間の職場体験学習を行っており、文部科学省が平成17年から「キャリアスタートウィーク」をスタートさせて以降、中学校での職場体験学習はメインストリームとなっている。職業や働くことについて

て探究的に学習する延長線上に、進路にかかわるような活動も位置づくといえよう。

1. 職場体験

- ②自分自身の将来に関わることを学び、何よりも自分自身と向き合えたから印象に残った（4年男子）。
- ②実際に自分が気になる職場の実情を体験することで、仕事への興味・関心が高まったため（4年男子）。
- ②職業について、初めて真剣に考えたから（4年女子）。
- ②自分たちが行きたい事業所で経験できたから（4年女子）。
- ②実際に消火訓練などを行えたから（4年男子）。
- ②マナーを学んだ。仕事に関心を持った（2年女子）。
- ②貴重な夏休みを3日間も取られた上にあまり面白くなかったから（2年女子）。
- ②将来について考えられたから（3年男子）。
- ②普段働かない場所で働けて新鮮だった（3年男子）。
- ②職場（消防署）での体験が印象に残っていたから（2年男子）。
- ②実際の職場へ行行って、実際に働いている人と一緒に仕事ができたと嬉しさと将来が少し明確になったような気がしていたから（2年男子）。
- ②自分は地域のスーパーへ行かせていただき、いろいろなものを販売する中で、裏でどのような準備をしているのかなどが分かった（2年男子）。

2. 進路について

- ①自分のいきたい高校をインターネットで調べる時間が1番記憶に残っている。②その高校の校舎や実績などを知ることができ、進路決定に役立った（4年男子）。
- ①進路指導（個別面談）。②面接練習（高校入試）で教員になりたい理由

を述べたら、「薄い」と教師に言われ残念な気持ちになったから（4年女子）。

- ①X大学（地元国立大大学）に訪問したこと。②中学3年生の時から高校卒業後の進路について考えさせられ、実際にX大の先生のお話等も聞くことができたから（3年女子）。

3. 人権教育・他者理解

- ①部落差別について。②実際に周りの地区でそういった問題があるため（2年男子）。
- ①差別について。（2年男子）。

4. 特別活動の補完

- ①何かを決めるための話し合い（委員会の係決め、文化祭の出し物）。②楽しかったから（2年女子）。
- ①修学旅行などの行事計画。②体育祭やその他の行事自体も楽しみにしていましたが、どうしたら楽しいものになるかを考えるのがすごく楽しかったです（4年女子）。
- ①修学旅行の事前学習。②戦争について学んで、その内容がかなり衝撃的だったから（2年女子）。

2017年改訂版の中学校学習指導要領解説（総合的な学習の時間編）において「総合的な学習の時間において探究的な学習が行われる中で体験活動を実施した結果、学校行事として同様の成果が期待できる場合にのみ、特別活動の学校行事を実施したと判断してもよい」という指摘がある。その一方、「平成20年の学習指導要領解説において、運動会の準備や応援練習などは総合的な学習の時間として適切ではないことが明記されたが、一方で十分な改善が図られていないという指摘もある。総合的な学習の時間と特別活動との目標や内容の違

いを踏まえ、それぞれの時間に相応しい体験活動を行わなければならない。」とある。ここでは学生の記述を踏まえ「特別活動の補完」として括ったが、総合的な学習の時間と特別活動との関連を意識し、適切に位置付けることが求められている。

高等学校でも、中学校と同様「職場体験」を挙げる学生がいくらかみられるほか、とりわけ大学進学に特化した進路選択に資する活動が展開されていたと読める。文部科学省「平成27年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」をみても、学習内容に「キャリア」を扱っている学校は普通科で90.8%と最も高く、二番目に多い「伝統と文化」の45.5%を大きく引き離している。中学校と同様、高等学校でも特別活動の補完的役割を担っていた側面もあるが、実際の実施状況と突き合わせても、学生（生徒）にとってキャリア教育の面が大きく印象に残っているのもうなずける。なお、中学校と同様「特別活動の補完」の部分が印象深いという学生もみられた。

1. 職場体験

- ・①職場体験。②より将来について考えられたから（3年男子）。
- ・①インターンシップ。②楽しめた（3年男子）。
- ・①インターンシップ。②より今後の進路に近い事業所で経験できたから（4年女子）。
- ・①インターンシップ。②社会の厳しさを知った（3年女子）。
- ・①職の話を聞く。②自分のためになった（3年女子）。
- ・①就職や進学を意識した内容（R-CAPなど）。②1年生の頃から気になる職業や就きたい職について考えさせられ、非常に力の入った進路学習となっていたから（4年女子）。
- ・①職業に関する内容。②自分のやりたいことについてとことん追求する時間が多いため（4年女子）。

2. 進路について

- ①大学しらべ。②自分の行きたい大学について考えることができた（4年男子）。
- ①進路を考える。②3年間のほとんどが進路に関する内容だったから（4年女子）。
- ①大学について調べました。②将来について考えられた時間だったから（4年女子）。
- ①進路についての活動。②自分の行きたい進路，大学を調べる活動や，先生と面談をして本当に自分が行きたいところなのか，行って何をしたいのかを話し，自分を見つめなおすことが出来たので印象に残っている（4年男子）。
- ①キャンパス訪問に行った→Y大学（都内私立大学）。（2年女子）。
- ①大学や卒業後の進路についての調べ学習。②自分の進路について具体的に考える機会になったから（3年女子）。
- ①大学進学先などの進路についての内容。②先生方も丁寧に指導やアドバイスをしてくださり，過去のデータ等も多く調べて教えてくださり，自分自身の進学に役立てることができたから（3年女子）。
- ①大学についての研究。②それしかした記憶なし（3年男子）。
- ①3年間を通して大学進学についてのことが多かった。（2年男子）。
- ①自分の将来の夢などを具体的に表現する活動が印象に残っています。総合の時間に先生と面談をしてよく相談にも乗ってもらっていました。②普段自分の夢などを紙に書いたりすることはないので，イメージがより詳しくできた覚えがあります。自由な時間が多かったので，調べ学習を中心に将来の夢について自分と向き合うことのできる時間でした（4年男子）。
- ①小論文指導。②毎時間，違う内容で小論文を書いていて得意不得意がよくわかり，苦手なジャンルでの小論文は全く手が出ず，悔しいなと思ったから（2年男子）。

- ①課題研究で検定勉強してました。(2年女子)。

3. 特別活動の補完

- ①文化祭の準備。②とても時間をかけていたから(2年女子)。
- ①修学旅行で訪問した施設やそこで学んだことをインターネットで調べたり、発表準備をしたことが1番記憶に残っている。②友達と協力し合って1つのものを作り上げることが楽しかった(4年男子)。
- ①クラスマッチ。②優勝目標にして全員が本気になった(2年男子)。

IV まとめと考察

本稿では、総合的な学習の時間が果たしてきた役割について、学生の回顧調査から探ることを模索した。2008年改訂版の解説(総合的な学習の時間編)には、「総合的な学習の時間においては、従前と同様に体験活動を行うことを重視し、積極的に学習活動に取り入れることとしている。例えば、小学校における自然体験活動や中学校の職場体験活動、高等学校の就業体験活動や奉仕体験活動などである。」と記されているが、本調査においても、小学校では自然体験活動、中学校では職場体験活動、高等学校では就業体験活動を挙げる学生が多く、概ねその傾向が看取できたといえる。

また、前述のとおり、総合的な学習の時間と特別活動との目標や内容の違いを踏まえた活動かどうかを読み取りづらい回答もあり、カリキュラム・マネジメントの重要性が確認できたともいえる。

小中高の連携においては、愛媛県総合教育センターで「小学校から高等学校へのタテの連携・協力が必要になってくる」としたうえで、「例えば、小学生の飼育・栽培活動に農業高校の生徒がアドバイスしたり、小学生と中学生が共同で地域の環境問題を追究したりすることなど」を例示しているが、それに加え、大学をはじめとする高等教育機関との連携も視野に入ってくるものである。

中央教育審議会答申（2015）には、「チームとしての学校」が必要な理由の一つとして「学校という場において子供が成長していく上で、教員に加えて、多様な価値観や経験を持った大人と接したり、議論したりすることは、より厚みのある経験を積むことができ、本当の意味での「生きる力」を定着させることにつながる」点を挙げている。

「横断的・総合的な学習」をもとに「よりよく課題を解決し自己の生き方を考える」総合的な学習の時間を充実させていくためには、学校と家庭、地域との関係を整理し、学校が何をどこまで担うのかを検討し、「チームとしての学校」を実現することが大事になるといえよう。

また、中教審答申には「学校と、家庭や地域との連携・協働によって、共に子供の成長を支えていく体制を作っていくことにより、学校や教員が、学校教育を通じて子供と向き合い、必要な資質・能力を子供に育むための教育活動に重点を置いて、取り組むことができるようにすることが重要である」と指摘されている。学生の回答にもあったように、南海トラフ地震等を想定しながら、防災・安全教育に取り組むことも重要である。「子供の安全を確保する観点からも組織的かつ継続的に子供の安全確保に取り組むなど、地域との連携・協働やボランティア等の地域人材との連携・協働は欠かすことのできない」（中教審答申）のである。

注

- 1) 学年にばらつきはあるが、概ね、小学校は1998年改訂、中学校・高等学校は2007・2008年改訂の学習指導要領に基づいているといえる。
- 2) なお、2008・09年改訂版以降は「自然体験や職場体験活動、ボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生産活動などの体験活動、観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること」（小学校・中学校）、「自然体験や就業体験活動、ボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生産活動などの体験活動、観察・実験・実習、調査・研究、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること」（高等学校）となっている。

参 考 文 献

- (1) 文部科学省『中学校学習指導要領』1998年。
- (2) 文部科学省『高等学校学習指導要領』1999年。
- (3) 文部科学省『中学校学習指導要領』2017年。
- (4) 文部科学省『中学校学習指導要領解説（総則編）』2017年。
- (5) 文部科学省『中学校学習指導要領解説（総合的な学習の時間編）』2017年。
- (6) 文部科学省『中学校学習指導要領解説（特別の教科 道徳編）』2017年。
- (7) 大学テキスト開発プロジェクト編著『総合的な学習の時間の指導法』日本文教出版、2018年。
- (8) 福島知津子「中学校及び高等学校での総合的な学習の時間における学びに関する学習者の事後の意識調査」『大阪女学院大学紀要』（15）、2018年、107-119頁。
- (9) 一ノ瀬敦幾「新学習指導要領における総合的な学習の時間の役割と各教科との関係」『教科開発学論集』第7号、2019年、137-143頁。
- (10) 諸富祥彦『「7つの力」を育てるキャリア教育－小学校から中学・高校まで－』図書文化社、2007年。
- (11) 中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」（2015）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf
- (12) 文部科学省「平成27年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2019/02/12/1413569_002_1.pdf
- (13) 愛媛県総合教育センター 「「総合的な学習の時間」における小・中・高の連携」
https://center.esnet.ed.jp/uploads/07shiryo/15sougou/H22_sougou-003.pdf